

こころに余裕はありますか

権 橋 宜 馬場 慶太郎

私たちの生活は日々便利になり、あらゆるコト・モノが目に見え、手に取れる世の中になりました。スマホから地球の裏側まで流行している洋服まで知ることができるのです。そんな現代に生きる私たちが一日に享受する情報量は、江戸時代に生きた人々の「一年分」に相当するといいます。平安時代にまで遡れば、受け取る情報は現代のたった一日で「一生分」だそうです。目まぐるしく流れる情報や、日に日に進歩する技術、豊かになつた生活の裏では悲しいニュースも後を絶ちません。戦争すら起きています。国内に留まらず世界で起きていることが瞬時に把握できる昨今では、煌びやかな高級車に乗り、人、高級ブランドに身を包む優雅な暮らしをする人たちの生活までわかれています。自分と他人とを簡単に比較できてしまうのです。

様々な情報が飛び交う日々に私たちの心は間違いない「疲れ」を溜めてしまっています。現代に暮らす私たちは、そんな心の疲れからくるストレスの捌け口として、他人を物理的に傷つけたり、家に火を放つたりしてしまったかもしれません。かの様なことは、昔前からあつたように思いますが、最近発達したインターネットやSNS上では特に、名前も知らない、やもすれば顔すら見たことのない赤い他人に誹謗や中傷を浴びせ、精神的に追い詰めてしまふといった質の違う手段が目立つようになります。それらの殆どは直接自身に関係のないことに腹を立て、関係のない他人を傷つけているのかもしれません。心の疲れは本人に限らず身近な人、よそ様にも害をもたらします。日本人には古来より自然を重んじ、神仏に祈りを捧げ、他人に感謝する美しい心が備わっています。神社は今も昔も変わらずそこにございます。時代が如何に変われど大神様は変わらず私たちをお守りくださっています。心の余裕がないと感じたら、お山に足をお運びいただき、自然に触れながら神に手を合わせてみてください。お身体は少々疲れるかもしれません、少しでも心の疲れを癒す一助となりますれば幸いです。

観月の調べ

10月12日(土)
開場 16:30 開演 17:30

御嶽神社あれこれ

石濱神社 御鎮座1300年

10月14日(月)
開場 16:30 開演 17:30

薪神楽・新能

御嶽神社あれこれ

太々神楽の里帰り

荒川区南千住鎮座の石濱神社は、神龜元年（七二四）九月十一日に聖武天皇の勅願により創建されたと伝える歴史ある神社です。中世には関東武士の信仰も厚く、近世には『江戸名所図絵』に描かれ「神明さま」と親しまれ、地元はもとより関八州より多くの参詣者で賑わいました。そして今年創建一三〇〇年を迎え、十月十四日に奉祝行事の一環として、当社の太々神楽が石濱神社の特設舞台で演じられる事になりました。

この石濱神社と御嶽との関係は、安永六年（一七七七）御嶽の神主（現宮司）に迎えられた、江戸橋場神明（現石濱神社）神主鈴木兵部の子息である郡胤の頃まで遡ります。そして鈴木郡胤の時に、橋場神明からほど近い真先稻荷

より神楽が御嶽に伝わりました。御嶽神社に伝えられた神楽は、素面神楽と面神楽に大別されます。素面では、舞う神楽は寛延二年（一七四九）に江戸真先稻荷より神話を題材とした里神楽が伝えられました。それ以来御嶽を信仰する各地域の集まりである講にとつて、太々神楽を奏上する事が念願であり講員拡大に寄与し、神社にとって重要な儀式として、舞と笛・太鼓は御師により三百数十年の間、代々受け継がれてきました。真先稻荷（現真崎稻荷神社）は、天文間（一五三三～一五五五）にこの付近にあつた石濱城の千葉之介守胤が、一族隆昌を祈念し城内に祀つたと伝えます。その後大正十五年には石濱神社境内に遷座され、今は本殿東側に祀られています。

石濱神社は浅草北方の隅田川沿いに鎮座し、関東大震災（一九二三）や第一次大戦では大きな被害を受け、残念ながら昔の面影は残されてませんが、寛延二年（一七四九）と安永八年（一七七九）に建立された石鳥居が奇跡的に助かり、現在参道に移設されています。震災や戦禍の中、この年代の鳥居が保存されていた事に、御嶽との縁をより強く感じます。太々神楽が取り持つ縁で、約二五〇年ぶりに里帰りして、石濱神社境内で太々神楽が演じられる事は、とても感慨深いものがあります。



上: 1954年当時 右手の2階建て「宝亭支店」



兄弟で守っている事にも心搖さぶられたが、この山と共に刻んだお二人の歴史にも感銘を受けた。御嶽山駅に着いて最初の売店宝亭支店は水きに渡り参拝者、登山者を見てきた歴史ある売店である。

御岳山売店紀行
宝亭支店



夏の御岳山登山、お目当ては日本一の群生を誇るレンゲショウマの花見である。ケーブルカーに乗って山上の御嶽山駅に着くと、この花を觀ようという登山客で大変賑わっており、人の多さに少々疲れがでた。駅の正面から見ると小綺麗で、こちらよりとした売店が目にとまり、「先ず休憩と食事をすると決め、中に入った。「宝亭支店」の入口には土産物や飲物、昔ながらのアイスクリームの冷凍庫がありどこか懐かしい。奥にはカウンターと小さなテーブルがいくつか置いてあり、女将さんらしき女性が立つていて小さな茶店の雰囲気である。椅子に座りメニューを見ると「ひきずりうどん」が目にとまった。初めて見る料理に興奮を抑えつつ注文した。

「宝亭支店」は戦後昭和二十六年ケーブル開通の時に現在の女将映子さんの父鈴木新一郎氏が宿坊賣壽閣の先代の紹介でこの地に店を開いたのが始まりで、一階は食事処、二階が喫茶店という店構えだった。当時二十二歳の映子さんは務めっていたカルビスを辞めて、住んでいた川崎から家族でこの山に来たそうである。店の歴史を伺つてみると、弟の新吉さんが「ひきずりうどん」を運んできてくれた。溶き卵が入った付け汁に、こしのあるうどんをネギと大根おろしを絡めて食べる、シンプルだが実に美味しい。なるほど卵が絡み麵を引きずつているからなのか、美味しいくてあとを引きずるという事なのかな?名前の由来を考えながら美味しく食した。